フィンランド幼児教育セミナー　議事要旨

日時　平成 23 年 9 月 20 日（火）15 時～16 時 45 分
場所　福井大学総合研究棟Ⅰ13 階大会議室

１　フィンランド幼児教育リポート（15:05～16:10）

２　本県幼児教育リポート（16:10～16:40）

福井大学　岸野と申します。よろしくお願いします。

私の方からは、福井県の現状と課題ということですが、みなさんは現場で現状に接しておられるので、釈迦に説法かと思いますが、いくつかの統計的なデータを基に今後の課題について、また、私の専門を活かしながらお話をしていきたいと思います。

大きく分けて３つのことをお話ししたいと思います。

幼児教育の現状と課題というのは、大きなテーマですので、簡単に触れるということになりますが、３つのことについて触れていきたいと思います。
一つは、子どもの学びの芽生え、これは学びの芽生えというのは現状でどのようなことが求められているのか。
もう一つは、子どもを取り巻く保護者をいかに育てていくか、サポートしていくか。
三つ目は、保育者同士、先生達同士の学び合い、世代を超えていかにつないでいくか。
この３つのことについて触れていきたいと思います。

早速ですが、これは（１頁)、本県の幼児教育の現状です。
５歳児のところが、特に特徴的で、入園率が９９．５パーセントということで、かなり高い割合で、福井県では入園率が高いことがわかります。このため、ここで担うべき幼児期の教育や学びというものをしっかり考えていく必要があると思います。

同時に就学前児童の昼間の居場所を示していて、先ほどのスライドのデータを入れていますが、全国の４歳以上の幼児の３９パーセント以上が保育所、５５パーセントが幼稚園、５パーセントが家庭となっています。福井県の５歳児は、先ほどのデータにありますように、ちょっと小数点が合わないですが、家

庭では０．０５パーセント、幼稚園が３１パーセント、保育所が６７パーセントで、全国に比べると、非常に保育所の通園率が高いことが読み取れます。

先ほどのハッカライネン先生のお話にもありましたが、ケア、養護の機能だけでなく、福井県においてもエデュケーション、教育の機能についても、やはり、私たちも考えていく必要があるだろうと思います。

では、どういった学びを育んでいかなければならないのか。

ここに、３つの視点で書きました。よく、知・情・意と言われますが、学びの芽生えの根底にあるのは、やはり、情動的な点ではないかと思います。それはたとえば心を動かさせることや、興味です。子どもは何にでも興味を持つと思いますが、実際にはそうではなくて、やはり、ここも育てていかないと、心を動かされるということはなかなかないですね。心を動かされるような経験とか場を設定したり、あるいは、こういったものを引き出していくといった関わりが必要ではないかと思います。

これに対し、もう一つ意識的なこと、注意の集中や切り替えと書きましたが、注意を何かに熱中して物事に集中して行うこと、これと同時に注意というのは集中して行うことだけでは駄目で、あるいはいろんなことに目が行ってしまうと駄目なんですよね。片づけられない人が注意欠陥障害などと言われたりしますが、これは注意があちこちに向いてしまう。「あっ、これを片づけよう。」、「あっ、ここにごみがあった。」というように注意があちこちに動いてしまう。これが基になっていると言われます。ですので、自分の注意というのは自分でコントロールする。こういう力というのも育んでいく必要があると思います。

ですが、注意だけでなくて、気持ち。何かやろうとしたときに落ち込んだり、気持ちがくじけてしまったときに、落ち込んだままにならないで、何とかしよう、落ち込まないで頑張ろう、何かをがんばってやってみようと試行錯誤する、こういうふうにやってみようとかというような意欲も育てていく必要があると思います。

最後に、知とありましたけれども、幼児期は特に体験的な、感覚的な気付きが非常に重要ではないかと思います。そして、これを言語化していくことが大事だと思います。

かつて、私が発達的に問題のあるとされる子どもの知能検査を行ったことがありますが、知能検査の中には４枚のカードを並び替えるという問題があります。それが、難易度によって違うのですが、問題があるのではないかという子どもがとても難易度の高い問題を解けてしまったのですね。それはどんなカードだったのかと言いますと、実は田んぼのカードだったのですね。耕しているところ、水をはってあって田植えをしているところ、そして、稲が成長しているところ、そして刈取りと。それは、実はとても難易度の高い設定になっていて、私たち福井県もそうですけれども、検査をした県も身近に田んぼがあるんですね。身近にある、だから、体験的、感覚的にそれらを簡単に並び替えてしまう。

だから、恐らく東京とか大阪とか、田んぼが身近にないところは、知識として田植えというのはこういうふうに進めるからこういうふうにするんだというように考えて並び替えることになるので、非常に難易度が高い設定となっているのだと思います。

こうしたことが、幼児期においても言えるのではないかなと思っていまして、体験的な、身近なところで、感覚的に培ったものは非常に重要ではないかと思っております。ただ、体験をたくさんしていても、それだけでは十分ではなくて、これを言語化していくこともやはり重要だと思います。

こういった中で、情と意のところにありましたけれども、自己の育ち、これは自己発揮といいますが、あれもやってみたい、これもやってみたい、こんなことをしてみようとする自己発揮の部分と、あるいは、何もかもやりたいと言っていては収拾つかないわけで、それで自分は何をしようかという自己抑制という部分があり、自己発揮と自己抑制の間で自分が何をやっていこうかということを考えていくことを育てていく自己の育ちがあります。

また、先ほど申し上げた田植えにありますように、体験的な中に学習の芽が埋め込まれています。田植えという社会の営みに触れる、あるいは稲の成長につながっていく。一つの体験であっても、いろいろな学習につながっていく芽になっているのではないかと思います。このため、そこに育てていくということが大切ではないかと思います。

それから、言語化と言いましたけれども、言語化とは一人ではできない。言語化とか、気付きというのは一人ではできないんですね。誰かと何かをしていく中で育まれていく、何かを伝えたいとか、気付いたことを考えて伝えたい、あるいは聞いてくるなかで育まれていくと思いますので、今、盛んに言われている協同的な活動というのも、ここで育まれていくものではないかと思います。

具体的な実践に移って、一つのある幼稚園でみた事例で非常に印象的な実践例です。その幼稚園では、さつまいも掘り、どこの幼稚園でもやりますよね。さつまいも掘りに行きました。すごく大きなさつまいもが採れました、たくさん採れました。ここで、先ほどの感情的な、情動的なものに触れるような経験を子どもたちはしてきました。それを先生は、とても大きな模造紙にみんなで書いてみようと言ったのか、何気なく書き始めたのか、どのように始まったのか私は知らないのですが、みんなで大きな模造紙にさつまいもを書き始めました。自分たちが採ってきたつるや葉っぱを書き、迫力のある絵が出来上がってきました。そして、今度は採れたお芋をどうしようかと、お芋祭りをしようか、お芋食べたいなあ、お芋をお店に出したいという子どもたちもいて、お芋を洗って切って、ホットプレートで焼いて自分たちで売ると。本当に売るわけじゃないんですけど、みんなに、お客さんに食べてもらうと。でも、それだけじゃ、いやだなあ、もっと自分は違うお店も出したい。ケーキのお店も出したいとかアクセサリーのお店も出したいとかいろいろなお店が出てきたり、あるいは、お祭りだからお神輿もいるよねえといった話になって、大きなお芋の形を、い

ろいろなボール紙を集めて大きなお芋を作って、これを神輿に乗せて運ぶ。お芋祭りの開始の時には、みんなでワッショイ、ワッショイと神輿を担ぐところから始める。そしてお店が始まって、お客さんに来てもらってみんなで食べる。先ほどのフィンランドの話で異年齢との関わりという話がありましたけれど、この中に５歳児の子が中心にやっていても、３歳の子も４歳の子も交わりながら、お客さんになって来たり、あるいは、私もお店をやりたいって言ってお店を出したり異年齢との関わりも入ってくる。そして、お祭りをやって盛り上がったあと、今度は運動会の時期となり、今も丁度運動会の時期だと思いますけれども、リレーをしている中で、お神輿で担いだお芋をバトンにしようかという話が出て、おおきなお芋を抱えて走る。こうしたこともやっていました。重さも大きさも違う二つのお芋なので、どうやって運べばいいのか。あるいは途中でトンネルみたいなところをくぐる場所がありましたが、ここでお芋を投げた子がいたんですね。大きなお芋を投げるのはどうだろうか、それはいいのかなあ。投げることについて子どもたちは話し合ったんですね。

そんなこともやりながら、最後の発表会、よく幼稚園でもやると思いますけれども、発表会の劇でも、今度は大きなお芋にしようと。うんとこしょ、どっこいしょと、それでもカブは抜けません。ここをお芋に変えたんですね。自分たちが採ったものを思い浮かべながらしてやりました。そんなこともやりました。

この事例は、私にとってとても印象的であったのですが、こういった経験というのは、小学校にもつながっていくような学びの芽が埋め込まれているように思います。それは、どういうことかというと、先ほどの知・情・意というのと重なってきますけれども、楽しかったなあとか、もっとあんなことやってみたいなあというように原点になっていく。そして実際にやってみるとうまくいかないことがある。ああでもない、こうでもない、どういうふうにしようかと相談し合いながら、試行錯誤し合いながらやってみる。そして、やっていく中でこんなことも出来たよ、こんなことも気付いたよ、こんなこともわかったよ。次はこんなふうにしてみようかというように子どもたち同士で相談し、次につなげる。

こういうことは小学校の授業の中でもあると思うんですね。小学校では授業で課題を与えられているのですけれども、この課題の中で、こんなふうに課題を解いていけばよいのかな、うまくいかないけど、でもこういうふうにしたらよいのかな、こんなことがわかったよというような学びの芽というか、学びの中で、遊びの中で、活動の中に含まれているのではないかと思います。こういったところを育てていくというところが幼稚園や保育園で必要ではないかと思います。

駆け足なのですが、続いて保護者のお話に移りたいと思います。

先生方もご存知かと思いますが、福井県は全国の平均と比べますと、非常に共働き率が高いと、５８．２パーセントとのデータが出ております。それによ

って、働くお母さんがいると言うことは、早くから保育所に入っていく、あるいは、大きくなっても乳幼児から小学校に入っても放課後児童クラブとかを利用して長い時間、どこかで子どもを見てもらうといったことが続いていくのが現状ではないかと思います。

しかし、一方で、幼児期というのは学校教育の段階の中で一番保護者が園と関わりを持つ時期ではないかと思います。お迎えというのも必ず保護者が来る。行事というと必ず保護者が参加する。だんだん、これが小学校、中学校、高校となっていくにつれて、保護者の関わりというものはなくても何とかなっていくと思います。そういう意味では、幼児期というのは保護者の育ちを支えるという意味でも一番のチャンスの時期ではないかと思われます。そして、保護者の育ちってなんだろうと思った時に、やはり子どもを見る目や子どもへの関わり方というのをより豊かにするということではないかと思います。それは、自分の子どもしか見ていないとわからないことが、他の子どもたちや他の保護者から学び得るものではないかと思います。

もう一つの福井県の特徴として、最初に三世代同居というのが減ってきているという話がありましたけれども、それでも、見てわかりますように、車で１５分以内にいる場合が２７パーセント、車で３０分以内の範囲に住んでいるのが１５パーセントというように半数以上の家庭が三世代として暮らしていると言えます。こういった三世代近居によって、やはり子育てについても知恵をもらいやすく、また助けてもらいやすい、そういった環境にあるのが福井県の幼児教育かなと思います。

しかし、一方で、例えば嫁と姑の関係をとっても、複雑な人間関係とか、古くからずっとそこに住んでいるが故の古いしがらみというようなものも出てくるのではないかと思います。

例えば、不登校とか発達障害とかが見えてきた時に、必要以上にお母さんが自分を責めたり、周りの目を非常に気にして身動きが取れなくなってしまうといったような、そういった問題も孕んでいるのではないかなと思います。

ですので、三世代だからよいとか、三世代じゃない方がよいといったことではなくて、その中の質を考えていく必要があるのではないかと思いますし、三世代近居ということもあるので、祖父母とか地域の大人たちを含めて、子どもたちを育てていく必要があるのではないかと思います。

育つというときに、私たちは子どもを育てているわけですが、同時に、それは自分たちが親であったり、あるいは祖父母であったり、地域の人々であったり、保育者であったり、「育てられる」ことでもあるのではないかと思います。子どもを「育てる」ことと、子どもに「育てられる」ことは表裏一体ではないかと思います。

私自身も小さな子どもがおりますので、じゃあ自分はどうなのか、何を育てられているのかなと思い、ちょっと考えてみたら、一つは、やはり喜び、子どもが育っていく喜び。こんなに自分が誰かに必要とされる経験は子どもを持つまでありませんでしたので、存在意義の喜びというのがあるのかもしれません。

さらに、人間関係、子どもがいなかった時にはあり得なかったような人々と出会い、出会いをたくさんもらっているような気がします。

それから、社会の見え方という点でも大きな変化があったように思います。これはいろんな人があるかと思いますが、私の友人でも、例えば新幹線に乗った時に、小さな子どもがワーワー言っているのを聞いて、昔だったら「うるさいなあ」と思ったことが、今は、子どもをみるとそんなふうに到底思えない。「うるさいなあ」と言っている人がいると怒りが込み上げてくると言っていたのを聞いたことがあります。私自身も、例えば、虐待の問題を考えても、かつては自分には無関係なことと捉えがちだったり、あるいは、「どうして虐待なんてするのか全くわからないわ」と思ったこともあったように思いますが、実際、子どもを持った時には、周りに何のサポートがなくて、一人ぼっちで、大変な、例えば育てにくいタイプの子どもであったとしたならば、それは一人で育てるのは本当に大変だろうなあ。手を上げたりすることは確かにどうかなとは思いますが、その大変さというものが少し見えてきたりしました。社会の問題の見え方というか、社会のいろんなやりとりとかの見え方が変わってくる。

そういった見え方というのが、自分の見え方にも重なって起きてくると思います。例えば、私自身、自分の子どもでもあります。だんだん言葉を覚えてきて、会話をしていたら、子どもが「まあね」というんです。「まあね。」と言ってちょっとにやっと笑って「ママみたい。」と。そこで私は自分がよく「まあね。」と言っているんだと気付かされる。自分自身の口癖とか、何をどうやって見つめているのか、自分の姿が子どもを通して見えてくる。そのような経験もあります。

それから、仕事をしていても大きなものがあると思います。特に、大学で仕事をしていて、学生と関わっているときに、昔だったら、きちっとやらない学生に対しては「どうしてできないのかしら。まったく。」と思ってしまったのが、「この子も大変なのかしら」とか、一人暮らしをしていたら「ちゃんとご飯食べているのかしら」とか、まず、学生の顔色を見るというか元気かどうかを見るというようか、背後をいろいろな側面から見るようになり、仕事人として人と関わる関わり方を見直しているような気がします。

というように、育てるというのは同時に育てられているということは~~も~~、日々の子育てをしていると、いろんなことに怒ったりとか、早くしなさいと目の前のことにおわれて、なかなか見えなくなってしまうんですけれども、こういったことを考えてみると、少し子育ての仕方とか子どもの見方、関わり方というのも落ち着いて見直せるのではないかと思います。

園でも、保護者がちゃんとしていないとか、あるかもしれませんが、こうした関わりの中で、自分も育てられているんだということを保護者自身が気付いたり、自分の見方を広げたり、あるいは深めたり、五角形、本当はいろんな形があるのかもしれないし、いろんな深みがあるのかもしれないことを、そういったことを深めたりする場とか関わりとかが保護者にも必要なのではないかと思いますし、また、これは保護者だけではなくて、祖父母や地域の人々、園に

関わる地域の人々においても同様ではないかなと、園に関わってもらう地域の人々に何かしてもらうわけですが、することによって、地域の人々も何か得られるもの、得ているものがあるのではないかなと思います。

さて、時間も押してきていますので、最後の話題に入ってまいりたいと思います。

これは幼稚園教諭の勤続年数で、幼稚園のデータしかなかったのですが、公立の幼稚園は、全国の平均　１８年に比べて１４年、あるいは私立幼稚園については全国８年が１２年。大体１２年から１４年のキャリアで辞めていくということが多いようです。恐らくは、結婚、出産による退職、そして、臨時とかパートでの雇用ということが、幼稚園、保育所でも多いのではないかと推測されます。

それから、幼稚園教諭の年齢分布です。青い方が全国の私立幼稚園で、非常に２０代が多い状況です。この青い実線が全国の公立の年齢分布で、４０代、５０代が多くなっています。

福井県を見てもやはり、点線のところですが、２０代、３０代が私立幼稚園は多いし、公立の方では４０代、５０代の先生が多い。

かなり世代にばらつきがあるということが上げられると思います。

世代を超えて学び合っていく、先ほど、子どもを育てる、育てられるというようにお話ししましたが、保育者についても同じで、若い保育者を育てる、それと同時に自分も育てられるというように、相互の学び合いが必要ではないかと思います。

子どもとか保護者との関わりを巡って、ベテランが子どもや保護者のことをどういうふうに考えているか、あるいは関わっているのかというところから、恐らく若い保育者は見て学んでいると思いますし、ベテランの先生たちは若い保育者たちに自分のやってきたことや自分の考えを語ることで暗黙にしていることを掴み直したり、あるいは見方を固定しているのではなくて、どんどん刷新していく、そういうことが起きているのではないかなと思います。

ですので、「打ち合わせ」ということでなくて、やはり、子どもとか保護者との関わり、活動をどのようにしていくか、中身のことを互いに語り合っていくことが必要だと思いますし、先ほどの世代が固まっているということも考えますと、ベテランだけでそれを支えていくというのは多分大変だと思います。

こうしたことを考えると、やはり外部の助けというのも必要だろうと思います。例えば、園内研修の中に、大学の研究者が入っていくとか、あるいは他の園同士の交流、例えば私立幼稚園と公立幼稚園のデータで世代の山が違っていたように、幼稚園ごとに山が違っているのかもしれません。園同士の連携も重要なのではないかと思います。

特に、福井県の特徴として、非常に小学校と幼稚園、保育所のある所が近い所にあるケースが多いように思います。他の県に比べると特徴的ではないかと思います。ですので、連携をより進めていけるとよいと思います。

先生方、子どもがいると、例えば保育園の先生が抜けて幼稚園を見に行くとか、あるいは幼稚園の先生が小学校を見に行くとかはまず無理だと思いますね。それらを考えたときに、やはり子どもも一緒に行く、子どもも一緒にみんなで活動する。例えば、保育園と幼稚園で一緒に活動するとか、保育園と小学校が一緒に活動する。その活動の中で、向こうの先生が子どもたちをどのように見ているか、どんなふうに関わるか、あるいは自分がどうなのかというように関わりを増やし、知ることで図られるのではないかと思います。

この連携ということに、３つの原則ということがよく言われております。

一つは互恵性。お互いにとってメリットがある。

そして、継続性。単発で、よく交流で幼小、また保小で交流自体はされていると思いますが、単発で終わるというのではなくて継続していく。継続していく中で、先ほどの芋掘りの話にあるように、次にこんなことをやってみようかというようにどんどん膨らんでいく可能性があるのではないかと思います。

これに、名前のわかる関係性。４年生と一緒に遊びましたとか、１年生と一緒に何かしましたというのではなくて、１年１組のなんとかちゃんと何かをしたというような名前がわかるからこそつながりができたこととか、次に何をやっていくかということが生まれるのではないかと思います。

この３つの原則は、子どもたちの連携だけでなくて、先生方同士の連携にも言えると思います。小学校に行って引き継ぎしてきたよというのではなくて、小学校の何年何組のだれだれ先生はこんな先生で、こんなことを一緒にやれるんだというような互恵性、継続性、名前のわかる関係性というものを先生達同士で育まれていくとよい連携になるのではないかと思います。

ということで、大変駆け足になりましたけれども、３つの視点、子どもたちの学び、保護者の育ち、そして保育者たち先生方の学びについてお話ししましたので、これらをもとに先生方でまたそれぞれ考えていただけたらと思います。

３　質疑応答

質問１（福井市教育委員会）

福井県でも養護と教育という面で、保育の面が大きくて幼児教育という点でどうしても進まないことがあるとのお話がありました。

福井市の場合でも、岸野先生がお話しされましたように、共働きがとても多くて、保育園に預けている子どもがとても多いんですが、フィンランドの方では家庭の教育力を高めるとか、母親とか父親に対しての支援というところで、どういうふうな工夫をされているのかを教えていただきたいと思います。

（ハッカライネン教授）

フィンランドでは、子どもの出生前からいろいろな角度からサポートするシステムが揃っています。例えば、ペアレントサポートシステムと言われているようなシステムがあり、心のサポートや教育的なサポート、経済的なサポート

があります。先ほども申し上げましたが、３歳以下の子どもを自宅で見ている母親に対して国から報酬が支払われます。家で子どもを見ているお母さんのサポートとして、日本語で言うと子育てカフェというような、一緒に集まって遊べるような場所があり、例えば図書館に小さいお子さんを連れていけるようになっています。

質問２（福井市教育委員会）

保育所の数が多く待機児童がいないということもありましたが、例えば、都会では働きたいけど保育所が足りないために働けないという保護者もいるのではと思います。保護者が本当はどうかということを踏まえて、実際の状況を示すデータとかがあるかお聞きしたいと思います。

（岸野准教授）

確かに、福井県には待機児童がいないが、本当は働きたいけど出来ないから幼稚園に入れているというケースはたくさんあるのかもしれません。私の方でも、保護者がどうしたいのかといったデータを持っていません。また、県も幼児教育プログラムを考えていく中で調査もしていくようなので、その中にそういった視点を入れて考えていきたいとおもいます。